

屈折形態変化の統語的影響

英語史における「空主語」の消失を例として

縄田 裕幸

1. 導入

本稿では、統語論と形態論をまたぐ言語現象として英語史における動詞屈折形態の衰退が空主語(*pro*)の消失に与えた影響に焦点を当て、この史的变化が共時的文法に対してなされた提案——細分化された CP 構造(Rizzi 1997)、素性継承理論(Chomsky 2008)、分散形態論(Halle and Marantz 1993 など)——によってどのように分析できるかを考察する。その際、英語の史的コーパスから得られた事実に基づいて分析を行う。

2. 論点

中英語における *pro* の分布とその消失の時期を特定するために、Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition を調査した。そこから明らかになった事実は以下のようにまとめられる。①*pro* が現れる場合、その解釈は 3 人称にほぼ限定される。②*pro* を許容する話者と許容しない話者がいた。③従属節では動詞中位語順でのみ *pro* が許容され、動詞末位語順では *pro* は現れなかった。④*pro* は後期中英語までに消失した。この 4 点が説明すべき論点である。

3. 提案

第一に、本稿では Rizzi (1997) の細分化された CP 構造に基づいて、初期中英語の基本句構造と素性の分布を(1)のように提案する。

(1) [_{ForceP} Force [_{TopP} topic/pronoun Top_[unumber] [_{FinP} subject NP Fin_[uperson] [_{TP} T_[tense] vP]]]

この構造では、代名詞主語は TopP 指定部に、NP 主語は FinP 指定部に、それぞれ生起している。また、定形動詞は主節では Top 主要部まで、従属節では Fin 主要部まで、それぞれ上昇したと仮定する。これらの仮定が与えられると、主節における「話題要素—定形動詞—NP 主語」語順と「話題要素—代名詞主語—定形動詞」語順、ならびに従属節における動詞中位語順がただちに導かれる。また、従属節の動詞末位語順は定形動詞が Fin まで上昇した後、TP 全体が TopP 指定部に移動することで派生されると提案する。また、(1)では Force がフェイズ主要部となり、その下の Top・Fin・T が非フェイズ主要部となる。Chomsky (2008) による素性継承理論のもとでこの構造を採用すると、どの解釈不可能素性がどの非フェイズ主要部に継承されるかに関して、パラメーター可変域が生じることになる。本稿では、UG によって許されるパラメーター値のひとつとして、初期中英語では解釈不可能な数素性([unumber])が Top に、解釈不可能な人称素性([uperson])が Fin に、そして時制素性 ([tense])が T にそれぞれ継承されたと提案する。このように数素性・人称素性・時制素性がすべて別個の機能範疇に継承されていたとする(1)の素性分布は、初期中英語の動詞屈折にみられる以下の形態的特徴によって独立した根拠を与えられる。(i)過去時制において時制形態素/-d/と一致形態素が共起することができた。(ii)数の一致をもつばら表す形態素として/-en/が用いられていた。

第二に、本稿では代名詞の音声的具現化と解釈に課せられるインターフェイス条件として(2)を提案する。

- (2) a. 感覚・運動 (SM) インターフェイス条件: ある代名詞が形態的具現化に必要なファイ素性を欠く場合には、その代名詞はゼロ形として具現化される。
b. 概念・意図 (C-I) インターフェイス条件: ある代名詞が適切に解釈されるためには、その指示性を復元するための十分な解釈可能素性を備えていなければならない。

通常これら 2 つの条件は *pro* の認可に関して相反する要求を課しているため、現代英語タイプの言語では *pro* は現れることができない。しかしイタリア語タイプの言語では、動詞屈折接辞が解釈可能であることによって(2b)が満たされるため、音声的具現化に必要なファイ素性を欠いた代名詞が *pro* として現れることができる。また、日本語・中国語タイプの言語では(3)の条件によって(2b)が満たされると提案する (以下、代名詞の範疇を便宜上 ΦP と表す)。

- (3) ΦP が話題要素として TopP 指定部にある場合、談話連結(context linking)によって指示性を得ることができる (cf. Huang 1984)。

ここから、いわゆる「強い主語脱落(radical *pro* drop)」が談話階層型言語でのみ観察され、主語卓立型言語ではみられないことが導かれる。

4. 分析

はじめに、論点①について考察する。pro を許した初期中英語話者の文法を「方言 A」と呼び、その方言における人称代名詞の語彙項目と形態統語素性の対応規則を(4)のように仮定しよう。

(4) a. [_P M, SG, 3rd, NOM] ⇔ /he/ b. [_P PL, 3rd, NOM] ⇔ /hie/

ΦP が音声的に具現化しないのは、ΦP の素性が(4)に示された指定に満たない場合である。例えば、数素性と格素性のみが指定されたΦP が現れる構造は(5)のようになる (<ΦP>は移動のコピーを表す)。

(5) [_{TopP} ΦP_[PL, NOM] Top_[PL] [_{FinP} Fin_[3rd] [_{TP} T [_{vP} <ΦP>_[PL, uCase] v VP]]]]

初期中英語では代名詞は TopP 指定部に現れる。したがって、(3)によりΦP は談話連結によって指示性を得ることができる。ただし初期中英語では Top と Fin が解釈不可能素性を持っており、これらに値が付与されなければならない。ToP の [unnumber]はΦP との一致操作により値を得ることができる。また、Fin の [uperson]は不履行 (default)により 3 人称の値のみを得ることができたとしよう。これにより「なぜ pro の解釈が 3 人称に限定されていたのか」という問いに対して「談話連結で 1 人称または 2 人称の解釈が得られると、Fin の人称素性の値と矛盾し、C-I インターフェイスで適切に解釈されないから」と答えることができる。

次に、論点②を考える。上の(4)では人称代名詞の各語彙項目に対して (性・) 数・人称・格がすべて指定されていた。しかし、3 人称を「1 人称でも 2 人称でもない人称」と規定するならば、3 人称代名詞の対応規則において人称の情報を指定する必要は必ずしもない。そこで、pro を許さなかった初期中英語話者の文法を「方言 B」と呼び、その方言における語彙挿入対応規則を(6)のように仮定しよう。関連する句構造は(7)のように表される。

(6) a. [_P M, SG, NOM] ⇔ /he/ b. [_P PL, NOM] ⇔ /hie/

(7) [_{TopP} hie_[PL, NOM] Top_[PL] [_{FinP} Fin_[3rd] [_{TP} T [_{vP} <ΦP>_[PL, uCase] v VP]]]]

この場合、ΦP が持つ素性[PL, NOM]が語彙項目/hie/を具現化するのに十分であるため、顕在的人称代名詞として具現化される。したがって pro を許す話者と許さない話者の違いは、3 人称代名詞の語彙挿入対応規則に人称素性[3rd]が含まれているかどうかにかんがって帰着させることができる。

続いて論点③に移る。従属節における動詞末位語順の構造は(8)のように表される。

(8) [_{ForceP} Force [_{TopP} [_{TP} t_{v+T} [_{vP} ΦP ... t_v]] Top [_{FinP} Fin+Vf t_{TP}]]]

この構造ではΦP は TopP 指定部の内部要素であり、それ自身が Top によって話題要素として認可されているわけではない。したがって談話連結から指示性を得ることができず、C-I インターフェイスで適切に解釈されない。

最後に論点④を考察する。中英語中頃の 14 世紀中に、複数一致形態素の /-en/が /-e/へと弱化した。そうすると、 /-e/はもはや数の一致のみを表す接辞として認識されなくなり、(9)のように数と人称を表す一致素性がともに Fin によって担われるようになったと仮定しよう。

(9) [_{ForceP} Force [_{FinP} (pronominal) subject Fin_[unnumber, uperson] [_{TP} T_[tense] vP]]]

この構造において数素性と格素性のみが指定されたΦP が現れると(10)のようになる。

(10) [_{FinP} ΦP_[PL, nom] Fin [_{TP} T [_{vP} <ΦP>_[PL, uCase] v VP]]]

この場合、ΦP 自身には解釈に必要な素性が十分に指定されておらず、かつ TopP 指定部にないため談話連結によって指示性を得ることもできない。したがって、「なぜ初期中英語に許容された pro が後期中英語に消失したのか」という問いに対しては「複数一致形態素が衰退したことで素性継承パラメーターが変化し、それにともなって人称素性を欠いたΦP が C-I インターフェイスで適切に認可されなくなったから」と答えることができる。

5. 結語

以上、本稿では中英語における pro の分布と消失に対して、細分化された CP 構造、素性継承理論、分散形態論を用いて説明を与えた。

主要参考文献

- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA. / Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 111–176, MIT Press, Cambridge, MA. / Huang, C.-T. James (1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15, 531–574. / Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281–337, Kluwer, Dordrecht.